

郷土室だより

中央区の海岸線 (その六)

◇図の範囲と浅草線

下の図はこのシリーズでおなじみの『武州豊嶋郡江戸庄園』、略称「寛永図」で見られた中央区の北東部に当る部分です。

まずこの図の範囲を簡単に説明しますと、図の下辺が「東」で浅草川、現在の隅田川が流れています。上辺つまり「西」側の端は図の左上の日本橋と、右上の神田川にかかる和泉橋にいたる線です。

したがって図の左端が「南」に当るわけで、日本橋・江戸橋の左に前号までに説明してきた「江戸前島」の一部が見え、またその下に茅場町の埋立地の一部も見えます。

図の右端が「北」に当ります。そこには太々と神田川が流れています。なお右端の和泉橋の北側に「在々」と書かれているのが見えます。この「寛永図」が描かれた時点の寛永九年（一六三二）当時は、神田川までが「江戸の内」であり、その北側は「在々」つまり「いなか」だったことがわかります。

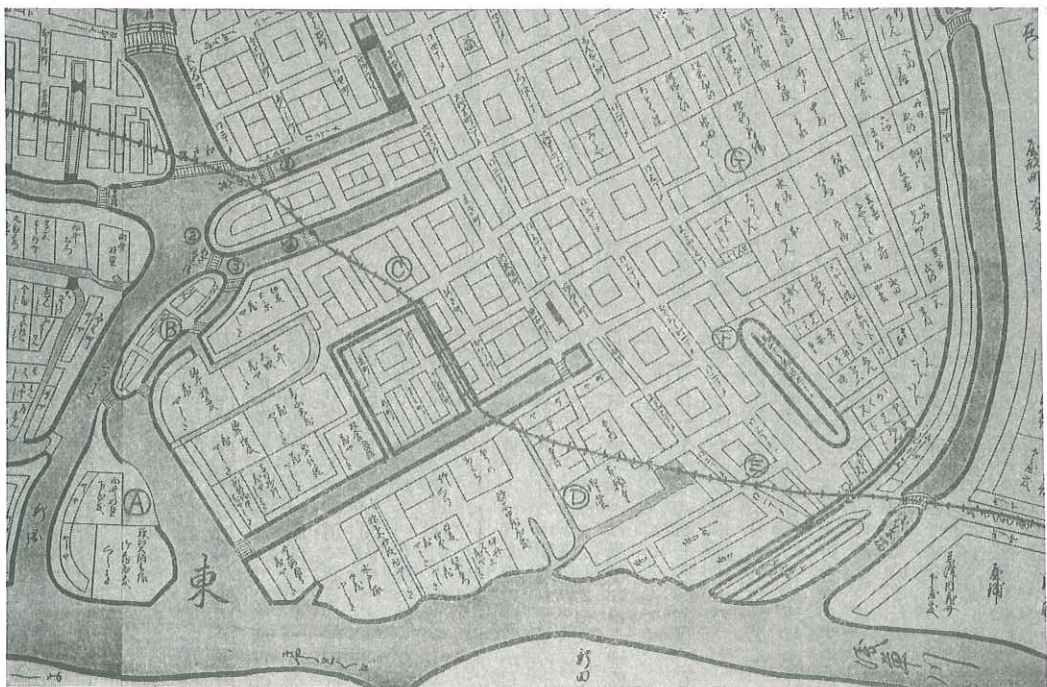
そしてこの三五八年前の地図に、都営地下鉄浅草線の大体の経路を書き込むという

、大変らんぼうな図が今号の下の図です。

なぜこのようなことをしたかといいますが、約四百年前の中央区の海岸線は、ほとんどこの浅草線と平行していたからです。

直接そのことを物語る前に、この図に記入した A、G の記号について、これも簡単に説明をしておきましょう。

- A 箱崎
- B 小網町
- C 人形町駅



、その下の一画が吉原。D 〓本願寺。
E 〓東日本橋駅。F 〓馬場、現在の J
R 馬喰町駅。G 〓神田薬師・遊行道場
(新宿線岩本町駅付近)。

◇三ツまたの変遷

はじめに A 〓現在の箱崎地区の原型
である「水滴」型の島に注目しまし
う。そしてその上の B 〓現在の小網町
に相当する島(この地図では「かきか
ら丁」と「はんぢやう丁」と書かれて
います)を結ぶ橋の左側の河流の中に
「三ツまた」と書かれています。

つまり A の「水滴」型の島の両側が
、現在の日本橋川が隅田川に合流する
河口部でした。「東」という大きな文
字のあたりは、いまでは東京エア・シ
テイ・ターミナルのある、高速道路が
幾重にも集中している所ですが、この
図が成立した当時は、日本橋川の本流
がこの部分を流れていました。

いまの日本橋川の本流は A の島の左
側の「新堀」と書かれた部分を流れて
いますが、「新堀」はあくまで本来の
水路に対して新しい水路を意味するも
のですから、三五八年前には現在の日
本橋川の流れ方とは逆だったことがわ
かります。

この「新堀」の上流に「三ツまた」

があるということは、A の「水滴」型
の島の頂点で、川が分流して三又にな
っていたことを表現したものでした。
ついでにこの三又(または三股、三
派とも書かれた)の位置の変遷を見ま
すと、元禄期以後になりますと三又の
位置はこの図でいうと「東」の文字の
下あたりに移ります。

それは「東」の字の斜め右下に「き
やうとく口」とあるように、隅田川と
日本橋川と「行徳口」すなわち江戸と
行徳を結ぶ小名木川の三つの川に分れ
る地点を意味するものでありました。

この位置は幕末まで変わりませんでし
た。それがわかる代表的な例は、天保
九年(一八三八)刊の『江戸名所図会』
では、次のように書かれています。
三派 新大橋の下、分流の所をいふ
。浅草川と箱崎の間の流れとの分れ
流るゝ所なればなり。(この所を別
れの淵と云ふは、汐と水との別れ流
るゝ所故にいう)この所は月の名所
なり。(因に云ふ、明和八年辛卯(一
七七七)中流を堰埋〔埋め立て〕
して人居とし中洲と称せり。されど
洪水の時、便あしきとて、寛政元酉
年(一七八九)に至り、復元の如く
川に掘立てらる。)

とあり、新大橋の上流から右に富士

、左に佃島を望んだ底抜けに広々とし
た三派の風景が描かれています。なお
一旦取り払われた中洲は、明治十九年
(一八八六)に再び埋立てて、島をつ
くり中洲と呼びました。

中洲もそうですが A の箱崎の島も、
ともに川が運んできた土砂が堆積した
もので、それを土台によそから運ん
できた土で盛り上げた埋立地だったこと
はいまでもありません。

◇浅草線の路線

こうした変化のあった日本橋川河口
部を除きますと、中央区の水ぎわ線、
とくに柳橋から大川端——浜町間の隅
田川沿岸部は、「寛永図」のむかしか
らあまり変化していないことに気づか
れるでしょう。

とくに図の右下から C の人形町駅ま
での浅草線が走る土地の地質は『都營
地下鉄建設史——1 号線』(一九七一
東京都交通局刊)の中の「工事施工
の概要」によりますと

「地質は隅田川を境にして右岸(注
〓大川端一帯のこと)は、東京山の
手の武蔵野台地の丘陵間に生じた浸
蝕谷を被覆した沖積層が広く分布し
、基盤は洪積世下部、鮮新世最上部
の成田層や、東京層に相当する地層

によって形づくられている。」
という書き出しで浅草——蔵前——浅草
橋間は「全般的に良好な土質」だと述
べています。

さらに浅草橋——東日本橋——人形町間
の状況についても「久松町より浅草橋
方面には、段丘状の地形が伸び、さら
に駒形方面へと連らなっている地質は
良好な砂質となり N 値は 30 以上である
。したがって人工河川である神田川付
近の地質も良好で河川内のヘドロ以下
は中砂・土丹・粘土の互層であった」
ともあります(傍点は引用者)。

かなりわかりにくい資料を引用した
のですが、要するに浅草線の浅草から
東日本橋と人形町の中間地点までの土
質は、ひと口に軟弱だといわれている
東京下町低地の中では異様なほど地盤
がいいことを物語っているのです。

こうした条件は『郷土室だより』第
69号の「中央区の海岸線(その二)」
の中に掲げた図 3 「日本橋台地の生い
たち」をみると、さらによく理解され
ることです。つまり上野台地の先端が
隅田川沿いに地表からもぐって、浜町
——佃島あたりまで伸びているために、
「土質が良好」なのです。
そうした地盤の上に古くから奥州街
道が通り、江戸と浅草観音を結びさら
に千住の宿までの幹線道路となり、そ

の道筋がそのまま地下鉄路線に選ばれたのです。

◇大門・人形町間の工事

『都営1号線建設史』の引用をもう少し続けてみましょう。

「地質は大門から新橋付近にかけては(中略)軟弱シルト質でN値は4〜8と非常に悪い。

新橋から宝町付近までは日本橋台地(注11江戶前島のこと)の東端に当り、細砂、礫混り粗砂および土丹の層序となり、細砂N値40〜50、礫混り粗砂N値50以上でよく締っている。

宝町^{マツ}から江戶橋にかけては古石神井「川」の谷にあたり(中略)砂以外のN値の平均は3と非常に悪く、23m以下に土丹層がある(後略)」。以上

の引用部分については、これも本号第69号の図1「海岸線の変化」を参照されると便利ですが、改めてまとめると大門―新橋間は日比谷入江の入口の埋立地のため、いわば軟弱地盤。新橋―宝町―江戶橋までは江戶前島なので地質良好。江戶橋から図の「志あん橋」を経てCの人形町駅の間に日本橋川・西堀留川・東堀留川と三本の

川がありますが、この間が『1号線建設史』でいう古石神井川の河口部に当るわけです。そこはひと口でいえばグチャグチャの沖積地で、地下鉄工事に限らず土木工事には最も不適当な場所でした。なおこの古石神井川とは、最近江神井川と呼ばれることが多いことも、つけ加えておきましょう。

◇N値(えぬち)

大規模な工事に限らず、最近木造以外の中小の建物を建築する場合でも、建築確認申請を出す時、このN値を示すグラフを添付することが多くなりました。ですから一般の人々にも案外身近なものになってきました。

このN値とは手っ取り早くていえば、地層のカタサ、シマリ具合を調べるとき、ある条件で杭を打ち込んでみて、何回杭の頭をたたけば、きまった長さで杭を打ち込めるかという回数のことです。

この場合の定められた条件は、杭の先きに外径51mm、内径35mm、長さ81cmの中空のパイプのような金具を取りつけ、それを重さ63.5kgの鉄の塊りを75cmの高さから落して、30cm打ち込むの必要とする落下打撃回数がN値です。このハンマーは標準的な大人の体重だと覚

えれば、覚えやすいでしょう。なお杭の先きにつける金具はスプリット・スプーン・サンプラーと呼ばれるもので、本来は地層から土のサンプルを採取するためのものです。

久松町(東日本橋駅)―浅草橋駅間では、ドンドンシンと三〇回、つまりひと打ちで一〇cmしか打ち込めないカタサであり、宝町―江戶橋間の「江戶前島」ではもっとカタクテ、四〇〜五〇回もハンマーを落さなければなりません。

それに対して旧石神井川河口に当る人形町駅では、ひと打ちで一〇cmも打ち込めるヤワラカサでした――余計なことですが、こうした地盤の悪い場所でも、技術の進歩で地下鉄工事が可能になり、出来上ったものも、なんら心配なく利用されているわけです。

それにしても人形町駅付近の工事は日比谷線を含めて、相当に割り高の費用がかかったことはいうまでもありません。

◇人形町駅と吉原

旧石神井川河口の葭や芦の生い茂る汐入りの低湿地、つまり海岸を埋め立てて、図のCにみるように四角の水路をめぐらせた一画を宅地造成して、葭

原を転じて吉原と呼ぶ歓楽街が出来たのは、家康が死んだ翌年の元和三年(一六一七)三月のことでした。この図の当時の吉原には江戶町・京町・けん蔵主町^{ケンサウ}・すみ町・新町などがありました。吉原の事は実に多くの本に書かれていますので、ここでは浅草に移転する前後の事情だけを紹介しましょう。

明暦二年(一六五六)十月九日、幕府はこれまでの土地は御用地として召し上げる。その代替地として浅草寺の北側か、本所を予定しているが、それはお前たちの希望にまかせるといふ命令を出しました。吉原の年寄(長老)たちは相談の上、翌三年二月中に浅草に移転することをきめ、十一月二十七日に移転料一万五百両をもらいました。

ところが年が明けた一月十八日の明暦大火^{メイレイ}振袖火事で移転直前の吉原も全焼し、浅草移転にはずみがつきました。つまり大火によって移ったのではなく、その前から移ることが決まっていたのです。

再び図にもどりますと、吉原の北側に前号(第72号 平成三年六月)でとりあげた江戶歌舞伎をはじめとする歓楽地帯がおかれた禰宜町、そして「おハリ町」などがあります。この「おハリ町」は一六五三年の承応図では「おハリ丁」、一六五六年の明暦図では「

をわり丁」となり、一六七〇年の寛文図からは富沢丁、トミ沢町などになっています。(ここでは承応図・明暦図・寛文図などの正式な図名を省略しましたが、どれもその時代の代表的な江戸地図のことです)。

国語辞典や古語辞典などでは「おわり」はお針、「おわり」は終りの意味で、国の名の尾張の場合には「をはり」または「ヲハリ」と書いていました。そんなことを頭に入れてこの図をみますと、吉原の北隣りの「オハリ町」は、ここまでで陸地が終りだという意味での「おハリ町」であり、現在の銀座四丁目にあった尾張町とはその意味がちがっていたのかも知れません。

◇旧石神井川河口

「江戸前島」の端の江戸橋から人形町駅に行くには、江戸橋を含めて三つの橋を渡らなければなりません。

前に紹介したように浅草線の建設史では、神田川は人工河川だとはっきり書いています。

実は日本橋や江戸橋がかかる日本橋川も人工河川に外ありません。それは昭和八年(一九三三)に刊行された『東京地下鉄道史』(現在の銀座線建設史)の中の「工事によって得た地質

図」で、はっきりと示されています。しかしその事実は長い間、なぜか無視され続けました。この川についての考証は江戸時代の多くの地誌を総合して戦後になって発表された代表的な結論でも大体が次のようなものでした。

「——細き流れに、橋ともいえないような二本の丸木が渡してあった——そして江戸の造成の進行とともに、慶長八年(一六〇三)に改めて橋がかけられた時、人々は誰いともなく二本橋を日本橋という様になった——」

お江戸の中心、二本橋ならぬ日本橋からして、この程度の認識による地誌が大手を振って通用してきたのですから「江戸」はいつまでたっても天下太平だったのです(人工河川日本橋川のくわしい事は他の機会にゆずります)。

◇思案にくれて

ふたたび「寛永図」の江戸橋にもどって、のちに魚河岸の一部になった小ふな町から「志あん橋」を渡ります。吉原や芝居町に行く人々が「行こかもどるか」と思案した場所だったから志あん橋＝思案橋になったと伝えられます。それはそれとしてこの付近の四つの橋(図の①②③④)の名は、その後目まぐるしく変化し続けました。

その状況は次の表のとおりです。この四つの橋の名の「いわれ」や物語りは、これまでに数多く書かれています。(三芳 亘)

旧石神井川河口の橋の名の変遷

地名	①の橋名	②の橋名	③の橋名	④の橋名
寛永図(一六三二)	志あん橋	わざくれ橋	名の記入なし	名の記入なし
明暦図(一六五六)	志あんはし	わざくれはし	名の記入なし	名の記入なし
寛文図(一六七〇)	あらめはし	しあんはし	わざくれはし	をやちはし
延宝図(一六七九)	しあんばし	わざくればし	名の記入なし	おやちばし
元禄図(一六九三)	アラメハシ	シアンハン	ワザクレハシ	ヲヤチハシ
宝暦図(一七五七)	アラメハシ	シアンハン	名の記入なし	ヲヤシハシ
文化図(一八一三)	アラメハシ	シアンハン	埋立廃橋	親父橋
昭和図(一九二六)	荒和布橋	思案橋	埋立廃橋	親父橋
現在	埋立廃橋	埋立廃橋	埋立廃橋	埋立廃橋

表は『江戸・町づくし稿』上巻(岸井良衛著 青蛙房刊)を参考に、④などを追加しました。

郷土室からのお知らせ

◎「郷土室だより」付図の発行について
 昨年発行した京橋地区に続き、日本橋地区の地図を二月初旬に発行する予定です。また、京橋地区についても増刷し、同時に発行します。

◎郷土室だより72号の訂正について
 一ページのタイトル「中央区の海岸線(その四)」を(その五)へ。二ページ三段10行目「勤めに」を「勤めた」へ。三ページ一段9行目「所には」を「所に」へ。四ページ四段で、川崎房五郎氏(江末歴史研究家)を(江戸歴史研究家)へ、訂正します。

代(の四時代)